

池田：いえ、授業を受けている、園下先生の。

深田：え？園下先生授業してるの？

池田：はい。家庭教師。

深田：そうなんですか。

山下：ネット上で？じゃなくて？

池田：今はネット上でやっています。

山下：そうなんですね。まあ、びっくり。よろしく願いいたします。山下です。

深田：あなたも先生で、園下さんが先生？何の先生？

池田：主に国語とか。

山下：国語の先生なんですか。

深田：まあ、女優になられた経緯をまず聞いた方が。聞かせていただいてもいいですか？

山下：はい。小さい頃から踊りをやっていたんですけど、ただ、足を壊して踊れなくなってしまって、それから目の前に真っ暗になって。若い時って世界が狭いのでね、何やっていいのかわからなくなってしまって、もがいている時に、ブレヒトの詩を読み始めたんです。どういうわけか。

深田：ブレヒト？

山下：はい。ベルトルト・ブレヒトというドイツの作家。

深田：ベルトルト・ブレヒト。

山下：ブレヒトです。どういうわけかそれを読み出して、そのブレヒトが戯曲作家なんですね。その人が芝居をやるよということのある友人が私に教えてくれて、高校3年の頃だったんですけども、3ヶ月で1本芝居をやるっていう、学校を離れて、初めてそんなところに参加をして、そこからお芝居を始めたんです。その時にまだ高校生で新劇なんて全く見た事がなかったんですけど、そこにいた人が仲代達矢さんの無名塾という劇団がありましてね。その講演があるから見に行こうと誘ってくれて、初めて演劇をきちんと見たんです。こんな世界があるのかと思っていましたら、無名塾から応募用紙が私宛に届いたんです。何だろうと思ったら、その誘ったくれた友人が毎年劇団員を募集している募集要項を私のために送ってくれたんですね。それでびっくりして、何か空欄があると書きたくならないですか。それで=を書いて父に猛反対をされながら応募してオーディションに。初めて芝居を始めたら3ヶ月後には決まっちゃっていたんですよ、オーディションを受けるって。

深田：すごいですね、大展開ですね。

山下：もう大展開。ジェットコースターみたいな展開で、あれよあれよと言う間に東京行きが決まって、全く心の準備ができていないままに高校卒業してすぐに東京に出てきたんです。

深田：かっこいいですね。

山下：右も左も分からないっていう感じで。

深田：その時は資金はお父様？それとも自分で働きながら？塾から出るんですか？

山下：塾生はそうなんです、いや出ないんですけど、養成所の費用なんていうのがないんです。

深田：そうなんですか。

山下：その代わりバイトもするな、親掛かりで、3年間は清く研究だけに専念しろっていうところなんですね。

深田：すごいですね。

山下：大体劇団ってバイトをしちゃうんですけど、バイトして夜の世界に行っちゃうとかね、そういうことになってしまうんですね。なので、それをしないように3年間だけはみっちりやれっていうようなシステムなんです。

深田：良い劇団ですね。

山下：そうですね。

深田：なかなか珍しい。

山下：真面目に育てようとしているという。

深田：いや、私その、ブレヒトに傾倒した経緯を伺いたっていう。